

マント



伊井直行

レワニワ書房

マ
ン
ト

伊
井
直
行

午後十時過ぎ、中央林間で田園都市線の急行電車に乗り換えた時、麻田宏明は、今日は悪い日ではなかったはずだ、と無理にも自分を納得させようとしていた。困難な任務をきちんと果たしたのだから。

その上、やむを得ず離婚することになったと麻田が考えている元妻と半年ぶりに再会し、遠くからではあるものの二人の子供の姿を見ることができた。元妻と子供たちの双方と話ができればもっと良かっただろうが、希望が半分と少ししか満たされなかったとしても、一つもかなわないよりずっとまじだった。期待をすべて裏切られる日など珍しくなく、小さな希望すら満たされない人生がいくらかもあることを麻田は熟知していた。

麻田宏明は、発車前に車両の半分弱の席を埋めた人々に目をやった。彼の知人や彼が助けた人間はいなかった。車内の騒音の中でも、麻田には車中の人々が心の内で吐き出す秘かな溜息や吐息が聞こえる。

金曜日の夜だ。髪をねじれた海藻のように頭にまとわりつかせた中年男が、七人がげベンチシートの上の端に座り込み、うつむいて臉を閉じていた。彼は紺色の背広の胸の奥で、壊れかけた心臓が煮えたつ鍋のようにぐつぐつという音に耳を傾けているのだ。二十代半ばの女が、携帯の画面を見ながら、今日飲み会で出会った男の勤務先と名前を、戦利品のように指先で

もてあそんでいる。塾帰りの女子中学生が、目の奥に鈍痛を感じて涙があふれそうになるのを、黒縁の眼鏡の下でこらえている。中年男の反対側の端に腰かけていた初老の男が、発車ブザーが鳴ると同時に立ち上がってホームに降りた。男は妻と高校生の娘の待つ家に帰りたいなくて、終点なのに下り電車から降りるのをためらっていたのだ。彼は、二週間前、勤め先にリストラされたことをまだ家族に話していない。

電車が白々と明るい地下ホームを後にして闇の中に滑り出すと、車内は薄暗く感じられた。天井の蛍光灯の光が、紗をかけたような濁った色合いで降りそそぐ。その光は麻田を不安にさせた。電車がトンネルを抜け、窓の向こうに家の明かりが見えると緊張が少しだけやわらいだ。

麻田は他の人には聞こえない小さな溜息をつくのを自分に許した。元妻との距離を縮めたかったのに、思い知らされたのは我が身の寄る辺なさだけだった。

会社を辞める、理由は言えない——十ヶ月前、麻田はこんな風に妻に切り出したのだった。円満退社で、やましいことはない。ただし会社を辞めた後、すぐに再就職するあてはないから、家族を養うのは難しくなる。もし、私と貧乏を共にしてくれるなら、それはそれで嬉しいが、息子たちを連れて実家に帰ると言うなら引き留めない。すべての責任は私にある。どんな非難も受け入れる。だが、こうしないわけにはいかないのだ。……

中学二年と小学六年の息子二人、妻の両親、それに麻田宏明の両親も、麻田を激しく非難した。妻は結局離婚を選んだのだが、麻田を非難しなかった。黙々と離婚手続きを進め、息子たちと一緒に実家へ帰っていった。妻の茅ヶ崎の実家は裕福だった。

妻が麻田を非難しないのは、こんな夫を選んでしまった自分にも責任があると思っ
てからだろう、と麻田は考えていた。しかし離婚後しばらくするうち、実は元妻は自分の苦渋を理解していて、それがやむを得ない事情と認め、黙って離婚してくれたのではないかと考え始めた。それならば、かえって、彼女になんの説明もしないのはまずい。すべてを明かすわけにはいかないが、誠実に話をすれば相互理解の領域を広くすることができるのではないか。だが、連絡をしようにも、妻の元の携帯は解約されており、かといって実家に電話をするのは気が重かった。

その日、麻田は、電車に乗って救助の現場に出かけた。要請の連絡は携帯メールで届く。事態は切迫していない。夕方までに藤沢駅に行けばいい。藤沢から茅ヶ崎まで二駅。麻田は考えた。もし首尾よくターゲットを助けることができ、かつ時間が遅くならないようなら、元妻の実家に電話して、会ってもらえないか打診することにしよう。

ターゲットは駅ビルの小さなカフェで働いていた。ガラス貼りの店には、小柄で愛想のいい女店員が一人だけいた。麻田が店から少し離れた通路に立っていると、お仕着せのえんじ

色のスカートとエプロンがよく似合う、長身で細身の女性が店に入って来た。外出から戻って来たようだ。恐らくこちらの女性だろうと思いつながら、正確な判断をするために麻田も店に入り、コーヒーを注文した。

壁際のスツールに腰かけ、長身の女店員の心の声にチューニングをしながら、コーヒーに口をつけた。途端、麻田は相手に集中しようとする出鼻をくじかれてしまった。このチェーン店のコーヒーがまずいのを麻田は失念していた。会社員時代に一度で懲りて、後は同僚にどんなに誘われても入らなかつたというのに。

一瞬、その店員と目があつた。よく、こんなコーヒーを飲めますね、という声が聞こえた気がした。彼女は二十五歳、二ヶ月前から、このカフェでアルバイトをしている。その前は都心の会社に勤めるOLだった。一年前、取引先の男とつきあい始めた。彼女は十人並み以上の容姿で、近づいて来る男は少なくなかつたが、その男は真正銘初めての恋人だった。それまで特定のボーイフレンドを持たなかつたのに大した理由はなく、ただ気乗りしなかつたからだ。その男とも、別に運命の出会いなどとは思わなかつた。変なやつだった。一緒に歩く時、自分の右側に立つことを許さない。一日に三回以上笑うと頭が痛くなるというので、夕方以降に会うと終始仏頂面をしている。ペットに南米産のトカゲを飼っている。

遠くに転勤するので別れようと言われた。少し涙が出たが、それでいいことにした。しかし、男は彼女の会社に来なくなつただけで、転勤などしていなかつた。別のやはり背の高い女と手をつなぎ、夕暮れの銀座の街を仏頂面で歩いているのを見てしまった。それが二ヶ月

と少し前。彼女は会社を辞め、しかしずっと家にいるのもいやなので、アルバイトを始めた。時々、声をかけて来る客がいた。電話番号を渡されたこともすでに二回。しかし、気乗りがしないのだ。今日、死ぬことに決めた。砂浜から海に入って。彼女は湘南育ちだが、まったく泳げない。

彼女のシフトは五時半に終わる。ジャケットにパンツの地味だが趣味のいい私服に着替えて、小田急江ノ島線に乗りこんだ。実家の最寄り駅の本鵜沼では降りず、終点の片瀬江ノ島まで行った。

彼女は駅のコインロッカーにハンドバッグを預け、海岸に向かって歩き出した。まっすぐ、ゆっくり、癖のない歩き方だった。優雅と形容したいくらいだ、と麻田は思った。彼女は、溺死の苦しさを、溺死体のむごたらしさを知らないらしい。麻田は、彼女の心に「溺死」という言葉を送ってみた。彼女の心には、なんの反応も生じなかった。

海岸公園に出ると、海からの風が急に冷たく感じられた。彼女は茅ヶ崎方向に向かって歩いた。辺りはみるみる暗くなっていく。

麻田は水族館の建物の影で身を隠すマントをはおり、首の下でギュッと結んだ。これで彼の姿は誰からも見ることができない。このマントのもう一つの効力は空を飛ぶことだ。最高時速はおよそ二十キロ、高度は地上数十メートルまで行けるのだが、上空では風の影響を受けやすい。また、あまり長い距離を飛ぶことはできない。

彼女は周囲に人の気配がなくなると、砂浜に向かって歩き出した。砂地に出て間もなく、

歩みを止めないまま靴を二足とも蹴飛ばすように脱いだ。

彼女の心は平靜だった。助けなど求めていない。なんてことだ、と麻田は慨嘆した。これでは生きていけないのも同じではないか。同じ死ぬにしても、いっぺん丸ごと人生を生きてみてもからにしてほしいものだ。そうしたら、いざ死のうとする時に、これほど安らかな気持ちではいられない。

麻田は早足で先回りをし、彼女の足首を自分の靴でひっかけた。彼女は片膝を砂にめり込ませるような姿勢でつんのめった。彼女は足下を確かめるようにしたが、もちろん何も発見できない。

彼女は服に着いた砂を払いもせず、また歩き出した。麻田は今度は彼女の膝の下辺りをはらった。彼女はうつぶせに倒れたが、かろうじて顔を砂にめり込ませることだけはまぬかれた。うつぶせの姿勢のまま、首だけをあげて左右に視線を走らせた。彼女の心に疑念が生じているのは明らかだった。しかし立ち上がると、またしても海に向かおうとする。ただし今度は足下でなにが起こっているのか見逃すまいとうつぶむいて。歩幅を小さく、一步一步慎重に。

麻田は彼女の背中を押して突き倒した。

「なにするのよ」と彼女は叫びながら倒れた。そのため、唇を「よ」と発音する時の形に尖らせ、かつ小さく丸く開いたまま、砂浜に接吻することになった。彼女はしばらく動けなかった。

麻田は、彼女のポケットから落ちたコインロッカーの鍵を拾い上げると、彼女から数歩分の距離を取り、次の行動を待った。

彼女はゆっくり立ち上がった。砂まじりの唾を何度も吐き出した。顔にこびりついた砂を払おうとしたが、手も砂まみれなので、かえって目に砂粒が入りこんだ。痛みは涙がにじんだ。ハンカチでぬぐおうにも、ハンドバッグはコインロッカーの中だ。彼女はもう一度、真っ暗な海の方を向いた。波頭だけが白く浮き立って見えた。彼女はその時、その日初めて波の音を聞いた気がした。彼女の心をのぞき込んでいた麻田も、自分がそれまで海の音を聞いていなかったのだという錯覚にとらわれた。

彼女はついに海に背を向けた。どうやら彼女の命は救われたようだった。だが、自殺という当面の目標を失った彼女の心は空虚だった。彼女が以後ずっと空しさを抱いて生きていくとしたら気の毒なことだ、と麻田は考えた。しかし、それは命の救い手である麻田の管轄外の問題だった。これから本当の人生が始まるんだ、と麻田はターゲットに向かって、届くのか届かないのかわからないメッセージを送った。

彼女は敗残者のような足取りで、靴を脱ぎ散らかした方に向かって歩き出した。麻田は彼女の靴の中にコインロッカーの鍵を入れた。

麻田は人目につかない場所でマントを脱ぎ、携帯電話を取り出した。すると、麻田の心は激しく動揺した。ボタンを押した後で、もう一度ターゲットを見た。彼女は靴を発見したところだった。右足にはき、すぐに足を靴から抜いた。そこに鍵が入っていたのだ。

呼び出し音が鳴り出した。元妻が出てくれることを麻田は心から願った。「もしもし」と言ったのは、懐かしい元妻の声だった。そこまでなら、麻田にとって、とてもいい一日だったはずだ。

元妻は、半年ぶりの突然の電話なのに、特に驚いてはいないようだった。おまけに、夕食の買い物で忘れたものがあるから、駅に行くのは都合がよいと言い、再会はあっさりとした。決まった。

茅ヶ崎駅で落ち合い、喫茶店にでもと麻田は提案したが、夕飯まで時間がないからと元妻は同意しなかった。麻田は、元妻に促されるように、駅前広場の片隅の人通りの少ない場所に移動した。

子供たちは元気か、とたずねると、元妻は駅舎の方をちらりと振り返るようにした。二人の息子がこちらを見ていた。麻田の視線に気づくと、二人ともそっぽを向いた。

「後で話をしたいな」

「それは無理でしょう」と元妻は言った。

じゃあ、なんで一緒に来たんだ、と思わず口に出しそうになったが、それは言わない方がいいと、なにかが麻田を押しとどめた。

麻田は単刀直入に切り出した。君が僕のがままを黙って許してくれたことに、今でも感

謝している。そして、君になんの説明もしなかったことで、今も苦しんでいる。といって、今なら説明できるというわけではない。ただ、君が僕になんの説明も求めなかったのは、僕が説明したくてもできないことを、君がある程度わかってくれているからではないか、と最近考えるようになったんだ。それは、つまり、僕には大事な任務があるということだ。この任務のためには会社を辞めるしかなかった。僕がこの任務、義務と言ってもいい、このことを通して、世界の中で、どんな働きをしているかということ、たとえばんやりとでも、君は知ってくれている。だから、君は理由も聞かず、僕を非難もしなかった。君は、今さらと思うかもしれないが、僕はそのことを確認しておきたい。誰からも理解されないと覚悟していた。君からも、家族からも。だが、君が理解してくれるなら、僕は満足だ。君になんをしてほしいわけでもない。望みは、君にうなずいてもらうことだ。君がうなずくのを見たら、僕は自分一人だけの巣に安んじて戻ることができよう。……

麻田が熱意をこめて話す間に、元妻は麻田から二歩分遠い位置へと後退していた。

「ごめんさい」と元妻は言った。「うなずくくらい簡単だけど、あなたが言う任務とか義務とかの話、私には全然わからない。それでも、うなずいた方がいいかしら？」

麻田の目に、元妻の明らかに戸惑っている表情が映った。表情と言葉の意味するものを理解することはたやすかったが、同時に素直に受け入れるのはつらすぎた。

「いや、いいよ」と返事した後、麻田はなにか別の言葉を続けようとした。しかし、頭の中が白濁していて、「いや、いいよ」と同じ言葉を繰り返すことしかできなかった。

「話の意味はわからないけど、あなたが立派な人だっていうことは理解しています。電車では必ず老人に席を譲るし、歩いていれば他人の捨てたゴミでも拾う……家族が一緒の時、挨拶を返さない近所の人に説教するのは、とても居心地が悪かったけど」

麻田が黙っているので、元妻が言葉を続けた。

「あなたが私にそうあってほしいと思うほど、私はあなたを理解していなかった。非難しなかったのは、そういう自分を責める気持ちもあつたからなの。それに、あなたは私の夫なんだから、他の人があなたを責めるようには、あなたを批判する気持ちになれなかった」

元妻はそう言って麻田の顔を見た。しかし、麻田と視線がぶつかりそうになると、目を伏せた。

「僕はどこまでもトンチンカンな馬鹿者だ」と麻田は言った。

元妻は首を横に振った。

「あなたに連絡をしようと思っていたの。でも、ためらっていたら、あなたから電話がかかって来た。一つ提案があります。怒らないで、聞いてくれる」

元妻の提案は、麻田が毎月支払っている五万円分の「養育費」をやめにしてはどうかということだった。うちは、もらわなくても困らない。両親もそれでいいと言っている。あなたが承知してさえくれれば……。

「いや、しかし」麻田は咄嗟に否定しようとしたが、言葉が出て来ない。

「再就職をしないんでしょう？　こんなことを言っただけで悪いけど、あなたにとって五万円は決

して小さなお金ではないんじゃない？」

麻田の脳裏に、預金通帳の印字されたページが浮かんだ。麻田は日給制の現場仕事しかしておらず、失業保険が切れた後、毎月一日の養育費振り込みはかなりの負担だった。どうしても五万円満額を用意できず、振り込みが数日遅れたことが既に二度あった。

「いや、養育費は、僕の第一の義務だ。やめないよ。五万円くらい、なんとでもなる」

元妻は麻田の目を見つめるようにした後、小さくうなずいた。麻田は、元妻と二人の子供たちと自分をつないでいる絆が、わずかな養育費以外に何もないのだと感じた。

「無理はしないで」と妻は言った。

「無理してでも払うさ。そうしたいんだ。できないなら、生きていても仕方ない」

元妻は首を横にふった。

「からだを大事にして。それから服を洗濯したり、お風呂に入ったりするのも忘れないで」
麻田は自分が今日は現場上がりで、作業着姿であることを思い出した。そんなことすら、気が回らなくなっていた。元妻と会ったのなら、もう少しましな格好をしてくるのだった……。

元妻は子供たちと合流すると、麻田の方には目もくれずに駅舎の中へ消えていった。三人で歩き出して間もなく、兄弟の上の方が振り返って一瞬麻田を見た。

麻田は元妻と別れた後、コンビニでおにぎりを買った。海岸まで歩いて行き、自動販売機のお茶と一緒に夕食にした。食後は、波の音と国道を走る自動車の騒音を聞きながら、ぼんやりしていた。いつの間にか九時近くになっていた。もし明日も現場に出るつもりなら、とつと帰って風呂に入り、早く寝た方がいい。

夜の上り電車なのに妙に混んでいて、東海道線でも小田急江ノ島線でも座れず、始発の田園都市線中央林間でやっと座席を確保したのだった。その電車も、横浜線の乗換駅である長津田で乗客が乗り込むと、空席はわずかなくなった。立っている乗客もいる。ベンチシートの上に座った麻田の横は空いていたが、誰も座ろうとしなかった。どうやら避けられているらしい。

会社員だった時、自分ならためらいなく座ったろうと麻田は思った。汗臭いくらいなら、なんともない。それより強いコロンや香水の方がいやだ。あれは頭が痛くなる。

田園都市線は会社員の路線だと言われる。確かに通勤時間帯にはそう見える。会社勤めの男女が電車の中にひしめきあい、座席が空けば容赦なく奪い合う。みなギスギスしていて余裕がない。会社を辞めてみると、そして二度と会社員に戻れない身に落ちてみると、会社員はそう悪いものではないと思えた。だが、現実には会社に勤めている限り、世間は薄ぼんやりした灰色の霧に覆われてしまう。

麻田もまた、灰色の霧が何を隠しているのかよく知っていたわけではない。ただ、彼は人々がつぶやく密やかな言葉を聞く能力を持っていた。幼少時から聴覚が異様に鋭敏で、ほん

の小さな物音や、遠くでささやき交わす人の声を聞き取ることができた。結婚し子供を持つ頃には、実際に音として発する前の心の声が聞こえるようになった。そうした声にぴたりとチューニングできた場合には、彼や彼女の内面を自分の心のように読み取ることができた。内心の声を聞くのは、時に恐ろしい経験だった。自ら死ぬと決めた心が発する特殊な周波数の信号をキャッチした場合には、特に。

ある日、地下鉄のホームに立っていて、自分のすぐ横にいる男が次の電車に飛び込もうとしていることが分かった。麻田は直ちにその場を去った。むごたらしい現場を見たくなかったのだ。

しかし、実際に「人身事故」が起こったことを駅のアナウンスで知ると、麻田は後悔の念にさいなまれた。なぜ、わかっていたのに助けなかったのか、と。それまでも、自殺志願者の発する声が届いているのに、何もせず聞き流していることに負い目を感じてはいた。だが、今回は積極的に逃げてしまったのである。

だが、どうすれば良かったのか？ 麻田は自らに言い訳した。赤の他人に、あなたは今自殺を考えているでしょう、いけませんよ、と話しかけることができるだろうか？ できたとして、何と説得するのか？ 麻田が秘かに聞いた中には、死ぬ以外の解決法がないと端からも納得できるほど悲惨な事情もあった。説得できないのなら、飛び込みそうな上着のしっぽをつかめとでも？ あなたの心の声が聞こえたからという理由で？ さっきの地下鉄の男は、完璧なポーカーフェイスで死に臨もうとしていた。表面上は、営業先に電車で向かって

いる会社員にしか見えないのだ。

「そうすれば良かったんですよ」とどこかから声が聞こえた。女性とも男性ともつかない。

「人目がなければやりやすいでしょう」

いつの間にか麻田の手の内にはふわふわと軽い布地があった。麻田は誰に渡されたのか、辺りを見回して確かめようとした。しかし実際にそうするより先に、前とは違う方角から声が聞こえて来た。

「自殺志願者は、説得して止めるのじゃなく、物理的に妨害するのがいいんです。このマントを使いなさい。羽織って首に結べば、あなたの姿は他人から見えません。空も飛べます。いづれ、携帯に連絡します」

麻田は今度こそ声の主を見つけようとしたが、地下鉄の通路を早足で歩く数多い男女の後ろ姿の中で、だれが自分に話しかけたのか判らなかった。

数日後、仕事中に、聞き覚えのある声で携帯に電話がかかって来た。会社の近所で自殺しようとしている人がいると教えられた。性別と年齢好も。麻田は勤務中だからと断った。数日後、勤務中に携帯メールが届いた。会社にマントを持って来ていなかったので無視した。少し心が痛んだ。次には休日、自宅にいる時にメールが来た。家族で外出の予定があったので無視した。その夜、麻田は眠れなかった。

翌日の朝刊に、麻田の家から自転車で行ける距離の踏切で飛び込みがあり、ダイヤが乱れたという記事が載っていた。

数日後、勤務中にメールが来た。場所は最寄りの地下鉄駅。ターゲットは同僚だった。その男は、入社直後、麻田に悪意に満ちた嫌がらせをしたことがあった。その後ずっと疎遠だったが、最近になって病気がちだという噂を聞いた。結局、放っておけなかった。

席を立ててトイレに行き、無人のトイレでマントを着ると、鏡の中で自分の姿が消えた。すれ違っても、だれも自分を見ない。ビルの外に出て地面を蹴ると、全身が宙に浮いた。手で軽くかきさえすれば前に進む。飛行するのはとても簡単だった。そのまま地下鉄の駅に滑り込んだ。しかし、地下鉄の駅構内は気流の流れが速く、かつ複雑なので飛行は困難だった。走ることにした。どのホームか聞いたはずなのに思い出せない。

同僚は隣のホームの端にいた。一瞬、階段へと戻りそうになり、次に自分が飛べることを思い出した。

「さよなら」という声が、麻田の心に届いた。

麻田は自分の真下で、かつて同僚だった人物がいくつかの肉塊に引き裂かれる場面を目撃してしまった。ショックで墜落しそうになったものの、なんとかホームに着地した。会社に戻っても、その日は仕事にならなかった。

以後、依頼は断らなかつた。性別不明の声で電話がかかることはなく、連絡は常にメールで来た。受信したら、無理をしてもすぐに会社を抜け出し、妻や子供との約束を破ること

も躊躇しなかった。

やがて、ビルの窓から直接空に飛び出す方法を会得した。窓やドア、ごく薄い壁なら、すり抜けられるのだ。もっとも、飛んでも自転車くらいのスピードしか出ないのだが。マントの効力は、連絡がない限り發揮できなかった。私用には使えない。これは特に頼まれもしなかったが、マントのことは誰にも秘密にした。妻に対しても。なにかが麻田にそうすべきだと強制した。

自殺志願者の心を、以前にましてよく読めるようになった。だが、いつも自殺を食い止められるわけでないのは、初心者だった時も、経験を重ねてからも同じだった。本当に死ぬと決めた人は、そう簡単には死ぬことを諦めないのだ。袖をつかんだ麻田の手を、まるで目に見えているようにきれいに払いのけられたことがあった。ビルから飛び降りようとしている人の足を五度払うと、その度に転びながら、五度立ち上がった。死の淵に向かって飛ばれたことがあった。

それどころか、こちらの見えなはずの体に抱きついて線路に倒れ込み、道連れにされそうになったことさえあった。かろうじて逃げ出したが、それが精一杯でターゲットを救うことはできなかった。助け損なうと、いやなものを見ることになる。慣れないと思っていたが、度重なるとそうでもなくなつた。だが、死体を見慣れることはあっても、助け損なつた後の苦しさは変わらなかった。特に心の内を深くのぞき込んだ後には。

麻田は、相手の心が自分に届くなら、相手にも自分の心の内が伝わってもいいのではない

かと考え、ターゲットに近づくとメッセージを送るようにした。あなたを助けたいと思っている人間がいる、と。おいしい食事や美しい景色、逆に恐ろしい死のイメージを送ったこともある。メッセージを受けた心が、それにはっきりとした反応することはまずなかった。だが自己満足でもいいと思っていた。

麻田は、自分がマントを着た命の救い手であることになじんでいった。やがて、誰の目にも見えない救い手、「ヒーロー」であることこそが自分のアイデンティティだと自認するようになった。麻田はかつて、自殺志願者の声が聞こえるのは繊細すぎる感受性のせいだと考えて悩んでいたが、そのような感受性の持ち主だからこそ、重大な任務に「招命」されたのだと誇りを持つようになった。

問題は、麻田の外側で徐々に膨らんでいった。家族は、理由もなく突然、あるいは取っつけたような理由を言い置いて外出する夫Ⅱ父に不審の念を抱いた。会社では、あまりに長くトイレに閉じこもったり、長い時間外出したり、またある時期から遅刻や早退が増えたりしたために、評判も勤務成績も悪くなっていった。当初は、妻や子供たち、上司や同僚が、麻田のことを心配してくれた。

だが、時が重なるにつれ、夫Ⅱ父、会社員として素行を改めない麻田は、次第に孤立を深めていった。妻や子供には、麻田は最初からいないものとして扱われるようになり、家族と

しての行動は父親抜きが当たり前になった。上司も同僚も、もはや麻田のことを気にかけなくなった。ただの問題社員であり、どうにかして辞めてもらいたいと考えている節さえあった。

麻田は真面目な人間だったから、こういった状況はつらかった。さらに、肉体的な疲労が追い打ちをかけた。占い師のもらう代金の半分が、相手の悩みを聞くという「重労働」の対価としたら、麻田は無償でこの半分の仕事をしていることになる。その上で具体的な人命救助の活動をするのだ。

空を飛ぶと、肉体的疲労は倍増した。簡単だったのは飛ぶ動作だけだった。地形と気流を読み、ビルやクレーンを避けながら飛行するのは、危険と隣り合わせであり、困難で疲れる作業だった。恐らく任務さえなければ、もっと気楽に飛べただろう。減多になかったが、任務が軽くすみ、余裕を持って帰る時は、風を切って空を飛ぶことが楽しく感じられた。

疲労が蓄積し、それらを同時にこなすことは日に日に難しくなっていた。麻田は、迫りつつある限界点を目前にして、どうすべきか真剣に悩んだ。だれとも知れない任命者に、たとえば「シフト」を変えてもらえないかと相談したかった。だが、携帯には相手の番号もアドレスも履歴として残らない。マントを焼き捨てるという選択肢があった。しかし、頭の中でそんなことを考えることすら、麻田には抵抗があった。もはやマントなしでは、自分が生きていく理由を見つけられそうになかったのだ。

結局、麻田はマント以外のすべてを捨てる決断をし、実行した。身を捨ててこそ浮かぶ瀬

もあれ、という野暮な言葉が麻田の頭に浮かんだ。だが、結局のところ零落したのだと麻田は悟った。宮崎台のマンションから溝の口の安アパートに引っ越した後のことだ。任務を遂行している間だけ、自らへの嘲笑から逃れられた。

しかし、一人になり会社を辞めた後、人を救う満足感は減少した。命が助かること自体は問題の解決にならない、と身に染みて知ってしまったせいらしい。助けられた人は、実際には問題だらけの人生を再開するしかないのだ。人生をリセットし、生き直す——そうあってほしい。自分はそうはならなかったが……。

ゴツンという音が車内に響いて、麻田は我に返った。電車は鷺沼駅に停車していた。海草のような髪の中年男も、透明な指先で戦利品をもてあそんでいた女も、涙をこらえていた女子中学生も、すでに電車を降りていた。

向かい側左手のドアの脇に、六十代後半に見える、年齢にしてはかなり大柄な男性が立っていた。なにか落としたらしく、下を向いて首を左右にしている。柔道かラグビーでもしていたのかと思わせるガッシリしたからだを、結婚式や葬式で着るような真っ黒の上下でくるんでいた。

大柄な男の落としたクロコダイル革の財布は、そばに座っている男の足下に転がっていた。そこは、中央林間で始発電車を降りた初老の男の座っていた席だ。座席の男は三十代前半、

濃いグレーのスーツをおしゃれに着こなしていた。その会社員風の男は、自分の股の間に財布が転がって来たのに気づくと、上半身をかがめて拾い上げた。

大柄な男も、自分の財布が座っている男の足の間にあるのに気づいた。男は、大げさかつ不器用な動作で、座席の方に向き直った。

会社員風の男が、大柄な男に財布を差し出した。位置関係から、献上品のように差し上げる格好になった。

大柄な男は、引っぱりあげるようにして財布を受け取った。そして、微笑にも見えない奇妙な表情を浮かべ、一言も発しないまま体を反転させて元の向きに直った。

財布を渡した男は、釈然としない表情で大柄な男を見上げた。男はだるそうな動作で、財布を胸ポケットにしまおうとしていた。

麻田は席を立ち、マントの入ったリュックを網棚にあげると、大柄な男のいるドアの近くに歩を進めた。男の両頬には長々と深いしわが刻まれていたが、よく日に焼けて健康そうだった。

「恐れ入りますが」麻田は男に向かって言った。「先ほど落とし物をされた際、拾ってくれた方に、お礼をおっしゃっていいのではないですか？」

男は麻田の顔を見下ろすようにしてにらんだ。言葉は発しないが、声が聞こえないわけはないらしい。

「こちらの方に」麻田は、端の席にかけている男を手で示した。「一言お礼を言っは、ど

うでしょう」

男の顔から微笑のような表情が消えた。

「お前には関係ないだろ」男の声は小さかったが、威圧感があった。

「おや、声は出るんですね。もしや、お声が出ない方に失礼を申し上げているのかと心配していました。それなら、なおさら、お礼を——」

「いい加減にしとけよ」

先ほどと同じ程度の小さな声。しかし今度はドスをきかせて。自分は、必要とあれば、脅しのようにものを言うこともできる人間なのだど威嚇していた。

麻田は喧嘩は弱いが、脅しを恐いと感じない性質だった。

「そうおっしゃらずに、一言ありがとうございます」

威圧する視線を避けるように頭を下げた。これが却って相手を刺激したようだ。男は麻田につかみかかるように一歩踏み込んだ。しかし、男は麻田に手を出すのではなく、座っている男に向かってたずねた。

「そこの方、私にお礼を言ってもらいたいかい？」

スーツの男は関わりになりたくないというように下を向いた。他の乗客も皆二人を注視していたが、二人の視線が向くと目をそらした。

「だれも、お礼をされたくて親切をするわけじゃないだろうが」

男は、今度は車内に響くような大きな声で言った。

「きちんと感謝の気持ちを表すのが、大人の態度だと思っています」

麻田がそう答えると、男は一気に麻田の喉元をつかんで来た。

「どういう権利があつて、お前は俺に指図するんだ」

「指図してはいません」麻田は相手の目を見すえたまま言った。「マナーは社会の共通の財産ですから、互いに尊重するべきだと思います。でも、まず暴力をやめて——」

麻田の首にかかる圧力が強められた。言葉が続けられないだけでなく、息もできない。

「この偽善者め。人をとがめる前に、自分の汚いくさい服をなんとかしたらどうだ」
すみません、と言おうとしたが、声を出せない。

「俺は、善人ぶったやつが嫌いだ。お前は、他人に礼儀を説けるほど立派な人間じゃないだろ」

言葉は、耳を通してというより、麻田の頭の中に直接吹き込まれるかのようだった。黒い服の男が罵倒しているのではなく、世界中が自分を非難している気がした。自分は本当に偽善者だったのかもしれない、と麻田は思った。

麻田のからだは宙に浮いた。天井の空調機器の出っ張り、麻田の目の前にあった。ぶつかる寸前、今度は強烈な下向きの力が働き、高速度で落下し始めた。麻田は背中から床に落ちた。痛みで目の前が暗くなった。胸に靴の底がのせられるのがわかった。

「お前みたいな偽善者は気味の悪い害虫だ。ここで一匹退治するのが世の中のためかもしれない」

麻田のからだは再度宙に持ち上げられた。続いて、床面に向けて二度目の急降下が始まった。今度は顔が下を向いている。自分はここで死ぬ運命なのだろうか、と麻田は考えた。自分には任務があるはずなのに、任務は我が身を救ってはくれないようだ。麻田は落下しながら、生きていたいと思った。まだ生への未練があるらしい——意外な発見をした気がした。その瞬間、初めて死の恐怖を理解したように麻田は感じた。自殺する人々は、こうした恐れを超えてまで、この世から逃れたかったのか——。

しかし、麻田は死ななかつた。無意識に受け身の姿勢を取って墜落の衝撃をやわらげると、そのままドアの外に転がり出たのである。麻田の身に元から備わった動きではなかつた。体操選手を補助するコーチのように、誰かが中空で手を差し伸べて助けてくれたみたいだった。麻田はホーム上でしゃがみこみ、痛みを耐えた。

「大丈夫ですか？」

声に反応して顔を上げると、男性が心配そうに麻田の顔をのぞきこんでいた。大丈夫です、と返そうとしたが、声が出ない。

「駅員さんに連絡して来ましょう」

ああ、いいですから、と言おうとしたものの、やはり声は出なかつた。駅員に連絡をしている間に、いまホームに停まっている電車は出てしまおうだろう……と思う間もなく、発車べ

ルが鳴り出した。

電車が走り出した後になって、麻田は立ち上がることができた。近くにベンチがあったのでへたり込んだ。

小さくため息をついた後、電車の網棚にマントの入りたリュックを置いたままであることに思い当たった。

あっ、と声が出た。

電車の走り去った方向に目をやった。電車は見えず、代わりに小走りに麻田に近づいて来る駅員の姿が目に入った。

「ホームに倒れている人がいる、と通報があったんだけど、あなたですか？」と駅員はたずねた。

「そうだと、思います。でも、もう平気みたいです」

駅員は、本当に大丈夫なのか確かめるように、黙って麻田の全身を見た。

麻田が駅員に向かって言った。

「すみません。からだはいいのですが、電車の中にリュックを忘れました」

麻田は駅員の後について駅務室に向かった。腰が痛んだが、そう悟られるのがいやで平気なふりをした。麻田はマントが失われる可能性に動揺していた。安心材料があるとしたら、あのきれいなと言えないリュックをわざわざ盗む人がいるとは思えないことだった。

ところが、駅務室でしばらく待って得られた答えは、見つかりません、だった。渡された

用紙に連絡先を書く間は、呆然としていたせいかわむしろ冷静だった。財布も切符も上着の中だったのは不幸中の幸い、と考えていた。

しかし再度電車に乗ると、リュックの重みを失った左右の肩の軽さが、麻田を深い屈託の底に陥れた。溝の口駅からアパートに向かう間、屈託は一足ごとに重さと深さを増していった。

小さなユニットバスの湯の中に体を沈めると、悔やむ気持が言葉になってほとぼしり出た。

「ああ、俺はなんてことをしたんだ」

自分が口にした言葉が間違っているように思えた。今度は小さな声で独りごちた。

「これから、どうすればいいんだ」

人助けをするために家族と安定した収入を失っても、麻田は耐えることができた。苦しさを上回る何ものかを得ていたからだ。たとえ自己満足だとしても、それはもう大分前から麻田の生そのものになっていたのである。ついさっき、自分の人生をなくした……。

翌朝、現場仕事に出かける気力が湧かなかった。水を一杯だけ飲むと、床に座り込み、忘れ物が見つかったと連絡が来ることを期待して携帯への着信を待ち続けた。しかし、電話は決して鳴らなかった。麻田の携帯には、救出の要請以外に連絡が入ることは殆どなかったから、これほどむなししい待ち時間はなかった。よしんば要請があったとしても、マントがない以上、応えることは困難なのだ。麻田は後悔と自責の念に耐えきれなくなり、アパートの外に出た。午後二時に近かった。

「何も困ったことなどないはずだ」

安っぽい金属音を立てる外階段を降りながら、麻田は自分に言い聞かせた。マントをなくし、救助ができないからといって生活に支障があるわけではない。むしろ楽になる。恐ろしい現場を目撃することも、仕事を途中で放り出して端から白い目で見られることもなくなるのだから……。

目覚めて食事をしていなかったのも、駅近くのハンバーガー屋に行くことにした。店に入ると、いくつもの声が麻田の耳に飛び込んで来た。うるさくてたまらない。指の助けを借りないで耳を閉じることはできないから、鋭すぎる聴覚は麻田にとってしばしば災いだった。それでも暫く我慢していれば、大抵は聞こえていても気にならない状態に移行できる。騒音や耳鳴りにもなれることができるように。しかし、どうもいつもと様子が違っていた。

通路を挟んで斜め向かいにいる制服の女子高生二人組の音が——他より大きくもないし、ばか笑いをしているわけでもないのに——特に鮮明に耳に届いた。二人は学校が楽しくて仕方ないらしい。友人や部活、憧れの先輩やお気に入りの教師のことなど、次々に話題を転換しながら会話が続く。二人の声の明るさは、直射日光に目を刺さされた時のように、麻田の耳に痛みを感じさせた。学校が楽しいなんてどうかしている……。

麻田は他の客に注意を向けて、痛みから逃れようとした。店内を見回すうち、見覚えのあ

る顔に気づいた。建築現場で働いていた時の責任者で、「組長」と呼ばれていた男だ。仕事に厳しく、滅多に笑わないので作業員みなに恐れられ、当然嫌っている者が多かったが、仕事ぶりを建築会社からは評価されているようだった。だが、下働きで補助的な作業を行う麻田にとって、関係のない天上人でしかなかった。

ある昼休み、救助要請が入ったので、麻田は体調が悪くなりましたと所属の班長に声をかけ、止めるのも聞かずに仕事場から抜けた。契約期間の途中だったから翌朝も現場に行ったところ、いきなり組長に呼び出された。

「俺の組をなめるなよ」

声と同時に、男の拳が飛んで来た。思わず目をつぶったものの、衝撃がない。目を開くと、拳は眼前で寸止めされていた。

「勝手に職場放棄する奴は、お前のような下っ端だろうと、俺の組にはいさせない。今すぐ出て行け」

その凄みのある顔は麻田の記憶にしっかり焼き付いていた。男は、楽しいな家族連れやグループの多い土曜日午後のハンバーガー屋で、一人浮いて見えた。

作業着でないから、珍しく土曜休みのようだ。しかし食事の相手もおらず、職場と同じ仏頂面をぶらさげている。休日には所在しないなら俺の仲間みたいなものか……麻田は、男の心の内に波長を合わせた。すると、意外にも憂鬱な気分ではないようだった。男の組は大手の元請け会社から高い評価を得て、直接仕事を受けられるようになったのだ。このため作業と人

員のやりくりが格段に複雑になり、休みの日だというのに、男は翌週の仕事の段取りを頭の中で組み立てて確認していた。

突然、男の心が乱れた。テーブルの向かいの席に、幼児を連れた女性がやって来たのだ。家族での外食……違った。離婚歴のある独身の母親と子連れのデートだ。幼児は母親の手を離れて男に近づく。

「パパ」

父親でもないのに、どうしたらこんな強面の男になつくことができるのか。

「ごめんなさい」母親は男に謝り、子供に声をかけた。「邪魔だから、こっちにいなさい」「いいよ」ほんの一瞬だが、男の表情がゆるんだ。「パパって柄じゃないけどな」

麻田は三人の幸福そうな笑顔に打ちのめされた。これ以上惨めな思いをしたくなくて、大急ぎで店の外に出た。

人波に流され、駅の空中歩廊にのぼった。そこも、晴れた土曜日の午後を楽しむ男女の声で満ちていた。麻田は、ハンバーガー屋で感じた違和感の正体を見いだしたように思った。

前日まで麻田の耳に届いていた内心の声は、おしなべて不幸の影が濃く、幸福なものはない。激しい苦悩や痛みも珍しくなかった。ところが今、そうした声は全く聞こえないわけではないものの、激減していた。楽しげな明るい声が、悩みや苦しみの声に取って代わっていた。

ここ溝の口に、今日は幸福な人ばかり集まったというのか？ 麻田は行き交う人々を見回

し、いつもと何も変わらないので、そうではないと考え直した。昨日までと何が違うのか？ ……変わったのは自分自身だったことを思い出した。昨晚までマントを持っていたが、今はない。リュックごとなくしたのだから。

麻田は自分が何を失ったのか改めて思い知らされた。人々のつらさを感じても最早助けることはできない。ならば、そうした声が聞き取りにくくなるのは理に叶っていた。幸福な声は、そうしたノイズを隠してくれているのかもしれない。

しかし、人々の幸福な声は麻田の耳に痛みを感じさせた。救助者として全ての力を尽くせるよう、麻田は家庭も仕事も投げ出した。崇高な任務だと信じたからだ。なのに、いま耳を痛めつける幸福な声は、まるで罰のようだった。何の罰なのだろうか？ その答えは……迂闊にもマントを電車の中に置き忘れたことか。麻田気分は、自ら出した回答のせいでさらに落ち込んだ。

麻田は耳の痛みから逃れ、精神の平衡を保つために、不幸そうな人を見つけてその声に聴覚を集中させることにした。しかし、なかなか見つけれられない。どうやら、昨日まで勝手に信じていたより遙かに多くの人が幸福の内に暮らしているようだった。それは意外でもあり、今となっては恐ろしくもある発見だった。麻田は不幸な声をさがしに歩き出した。

ティッシュ配りをする男女の姿が目に入った。無職になってから、彼らが通行人みなに平等にティッシュを配っているように見えて、実は微妙に選別をしていることに気づいた。無職の麻田は避けられるようになったのである。しかし、麻田は、そんな意地悪な連中の心の

内に不幸な、暗い鬱屈がわだかまっていることを知っていたので、気にしなかった。

麻田は自分が避けられるのを期待しつつ、ティッシュ配りの女に近づいた。もう何日も同じ服を着ていたから、そうされて不思議ではないはずだった。

しかし、女は、前の人に続いて麻田にもティッシュを渡したのである。それどころか麻田が受け取ると、笑顔で、ありがとうございます、と感謝の言葉を発した。彼女の心の内には幸福こそなかったものの、鬱屈や痛みや怨嗟といったネガティブな感情も見いだせなかった。穏やかな川の流れのような時間が、彼女の心の表面をただ通り過ぎていた。そういえば、俺も勤め人だった頃は、こんな風に勤務時間をやり過ぎしていたのだけ……。麻田は別の不幸そうな人間を捜すことにした。

花壇のブロックに、へたりこむように坐っている太った若者がいた。二十代半ばくらいか。手入れされていない半端に伸びた髪、何年も前に母親に買い与えられたと思しい服、大きな紙袋を脇に置き、いわゆるオタクの風体だった。だが、麻田が注意を向けたのは、単に彼がいかにもなオタクだったからではなく、一目で察せられるほど深い疲労の気配を全身に滲ませていたからだ。

麻田は、通路を挟んで若者の斜向かいに陣取り、内部の声を聞くことにした。彼の自宅は溝の口から電車で一時間くらい距離だったが、近所のコンビニくらいしか行かない引きこもりの彼にとってはここまで来るのも大冒険であり、大変に疲れることだった。コンビニ以外で彼が出かけられるのは秋葉原に限られていた。そこで店頭販売限定品が出た時には、勇

を鼓してはるばる遠征するのだ。

ところが先日、わざわざ出かけた秋葉原で、「柴咲魔美華 ソロデビューエディション」(それが何なのか麻田には分からなかった)をタッチの差で買い逃したのである。数日後、彼は目当ての品がネット上で売りに出されているのを発見した。交渉の結果、元の値段の三割増しで売買が成立した。売主が溝の口駅での代金引換を指定したので、彼はやむを得ずここまで来たのだった。

売主は同年代らしかったが同好の士などではなく、最初から転売が目的らしかった。彼を弱々しいオタクと侮り、約束の額を受け取った後、この値段の倍で買うという客がいる、もっと出さないと渡せないと言いつ出した。支払後の持ち合わせは二千数百円しかない。そう言つて財布の中身を見せると、売主は散々毒づいたあげく、千円札を二枚抜き取った。こうして限定品はようやく彼のものになった。

麻田が彼を見つけたのは、品物を受け取ったすぐ後、疲労困憊して花壇のブロックにへたり込んだところだったのである。彼は暗い気分沈み、限定品の最初の売り出しに出遅れたことを今さら悔やんだり、脅されて二千円余分に取られたことに腹を立てたりしていた。幸福な声に脅かされていた麻田にとって、恰好のターゲットと思えた。

ところが、心の声を聞き始めて間もなく、男の負の感情は薄れ始めたのである。奥底から、何かほの明るいものが滲み出して来た。

溝ノ口に来るといふ苦しい旅、見ず知らずの相手と会話をする困難、売買を成立させて「柴

咲魔美華ソロデビュー「エディション」をゲットするというミッション、自分は全てを成し遂げた。これって、結構すごくないかい？ そんな風に考えたら、彼の胸の内に達成感が湧いて来たのだった。かつてないほど心が高揚している——二度と売られることがないかもしれない限定品を手できたんだ。それに較べれば、二千元くらい何てこともない。この後、家に帰り着いたら、限定品の「柴咲魔美華」と二人で無上の時間を過ごすことができるんだからにゃ——。

そこまで聞き取ったところで、麻田は耳の奥に痛みを感じた。ターゲットの男は紛れもない幸福の内にいた。金で手に入れることのできる商品、命を持たない人工物のおかげであるにせよ、男の心に幸福感が宿ったのは間違いない事実だった。

麻田は逃げ出すように歩き始めた。自分にはあの男が持っている程度の幸福すらないと考えてしまったのである。彼は自らを傷つけようとする思考の働きを打ち消そうとした——いや、俺は、これまで何人もの人間を救って来た。彼らはすべて、真正正銘、本物の生命を宿した人間だった。あんな、生きた人間と関わるのができないような男をうらやむ理由などない……自分が惨めな劣等比較をしている気がして、麻田は考えるのをやめた。

代わりに空を見上げた。すると駅ビル最上部の広告看板の表面に、マントを翻して飛んで行く者の影が映ったように思った。しかし、瞬きする間に消えてしまった。

週が明けて、麻田はハローワークに行った。その地域の「ハロワ」は溝の口にあったので

ある。仕事を捜すためでもあったが、幸福な人の少なそうな場所にいたいからでもあった。後者の願いは叶えられた。一方、仕事を見つけたという意欲は薄かった。働きたくないのではなく、何をする気力もなかった。ただ、肉体労働を続けるのに倦んでもいた。

麻田は「ハロワ」で見つけた営業系の求人先で面接を受けることにした。ずっとしまったままだったスーツを引っ張り出し、ワイシャツにネクタイを締めて指定の場所に向かった。

途中駅でトイレに入り、小便をすませて手を洗おうとした時、麻田は鏡の中にみすぼらしい中年男が映っているのに気づいた。それを自分だと認めるのは苦しかった。日に焼けた顔は煤けて見えた。スーツは皺だらけでワイシャツは薄汚れ、ネクタイは襟の下でゆがんでい

る。鏡の中の中年男は、全ての希望を投げ出してしまった人の目をしていた。麻田はくずおれそうになった。俺はもう長い間、鏡すら見ていなかったのか。いや、そんなわけではない。今朝だって一応鏡の前に立った。つまり、家の洗面台の鏡は俺にやさしくて、ずっとフィルターをかけてくれていたわけだ。絶望しないように……。

突然、携帯が鳴り始めた。一瞬、救助要請の呼び出しかと思った。しかし、メールの着信音ではなかった。初めて見る番号だったので、面接先からだろうと考えた。こんななりでは面接に行けそうにない……。

通話ボタンを押すと、相手は地下鉄の遺失物取扱係と名乗った。駅に放置されていたリュックサックを保管しており、中にあった連絡先メモの番号に電話しているのだ、と。

麻田は、鏡の中で自分が生き返る場面を目撃した。

面接先に断りの電話を入れたら、嫌味を言われた。何も気にならなかった。そんなことより、取扱所のある飯田橋に早く行きたかった。

取扱所に保管されていたのは、確かに自分のリュックだった。しかし、窓口の係に促されて中身を確かめたところ、読みさしの文庫本やティッシュは残っていたものの、マントはなかった。

人間は自分の外見を直接見ることができない。だが麻田は自分の表情を、目の前にいる人のようにありありと映像化することができた。先刻、鏡の中にいた自らの姿を思い出せば事足りたのである。いや、恐らく鏡の中で見た時よりひどかったはずだ。

麻田は駅を出て、呆然と歩き始めた。何をするあてもなく、当面歩くか座るかとの二つの選択肢しかなかったのだが、座るのに適当な場所が見つからなかった。

前方に交差点で信号待ちをする人々の後ろ姿が見えた。会社の昼休み中らしい男女が多く、他はベビーカーを押す母親や年金暮らしの年齢と覚しい老人など雑多だった。交差点に近づくと連れ、人々の発する声が麻田の耳に届くようになった。幸福な声もそうでないものもあった。

幸福な声も、そうでないものも、両方わけへだてなく麻田の耳に届いた。わたしが、おれが、この人ときあっていること、みんな全然気づいていない、ばれたっていいんだけど、うまく内緒にしないと……この交差点を過ぎたら、藩邸のあった場所について説明するでしょう、また、この人、蘊蓄を語り始めそうな顔している、もうウンザリ……。

今や、幸福な声ばかりが耳に届くのではなく、幸福な声が耳に痛みを与えることもなかった。マントの喪失が確定して、さらなる変化が訪れたようだった。救助者の役目を完全に解かれたということなのか……そう考えた直後、麻田は自らの体内から、何か大事なものが一挙に抜け落ちていく感覚を味わった。どうやら、生きている意味を完全に失ったようだ。

麻田は人々の背中から目を上げた。交差点の向かい側にあるビルが目に入った。その雑居ビルの屋上で、麻田は投身自殺を企てていた男を止めたことがあった。あのビルは不用心で、部外者が中に入って屋上に出来るようになっていた。おまけに下の方に出っ張りがあるから、通行人を巻き添えにしないですむ。あの男が飛び降りていれば、ビルは予防措置をしただろうが、きっと今もそのままだ。今日という日のために俺は準備をしていたことになる。麻田は信号が変わった交差点を歩きながら、自分が平静であることに少しばかり驚いた。まるで湘南海岸で救ったカフェの女店員みたいだ。死ぬと決めたら、マントを失った絶望感も消えた。人々の声は、もはやただの街のざわめきでしかない。こういう風に心静かに生を終わらせる人間も少なくないのだと理解した。

麻田は勤務先に行くような調子で、雑居ビルの出入り口を通り抜けた。ガタガタ揺れるエレベーターで最上階に行き、屋上に続く階段を上がった。そこには給水塔やエアコンの室外機、様々な太さのパイプ類が乱雑に据えつけられていた。

外に出たところで、麻田は空を見上げた。マントの「ヒーロー」が助けに来る可能性に思い至ったのだ。近づいて来たとしても目には見えないだろうと思いつながら、麻田は空を見回した。そうした後で、救助に来るはずはないと改めて思った。なにしろ、死ぬと決めたのはほんの二、三分前だったから。麻田への救助要請は、ターゲットが死を心に決めてから実際に行うに移すまで、ある程度時間の余裕がある場合に限られていた。

それでも、念のために、自らの意図を気取られないように努めた。頭の中に死や自殺という言葉を思い浮かべたり、家族や死後のことを考えたりしないよう気をつけながら歩を進めたのである。

屋上の周囲の鉄柵は、一跨ぎで越せそうなほど低かった。

肩からリュックを外し、屋上の床面に置いた。そして、鉄柵の下の床面から一段高くなった敷居の部分に片足をのせた時、浅田のからだは見えない腕でガッシリと抱き留められた。

やっばり来たか……ため息をつくようにつぶやいた。迷惑なやつだ。というか、俺はずっとこんな余計なことを必死でやっていたんだな。

麻田は肩の下辺りで組まれた腕を振りほどこうとした。しかし、うまく力が入らないので、敷居の段差にのせていた片足を降ろした。その上だからだを入れ替え、拘束から逃れようとした。この間まで救助側だったから、見えない相手でもうまく対処できると思った。

麻田はぐいと腰をかがめて相手を投げ飛ばそうとした。しかし、なお腕をほどこうとしないものだから、二人して床面に倒れてしまった。相手はより力を込めて抱きしめようとする。

床面を転がるうち、麻田は屋上の機器の角に接触して痛い思いをした。相手も同じように何かにからだを激しくぶつけたらしく、一瞬締めつける力がゆるんだ。

麻田はその機を逃さず、相手をはねとばして拘束から逃れた。立ち上がって、ビルの端に向けて駆け出した。しかし、後ろから片方の膝の裏を激しく打たれてつんのめり、再び二本の腕につかまえられた。麻田と見えない救助者とは、この後も無言で取っ組み合いの格闘を続けた。

やがて相手の息が上がり、次第に腕の力が弱まって来た。麻田も疲れ果てていた。だが一つのアイデアが脳内に閃くと、急に気力を回復した。

麻田は自分の首の後ろに両手を回し、マンツの結び目に指をかけた。堅く結ばれていたが、うまいぐあいに端をつかむことができた。思い切り両側に引っ張って手を放すと、マンツは床面に滑り落ちた。

しかし、落ちたマンツは見えるのに、相手の姿はどこにもなかった。どういうことだ？と思う内、マンツが動き出した。マンツと接触している間、救助者の姿は見えないのか？そんな設定があるとは知らなかった。

突然、マンツを取り戻したいという願望が、浅田の胸の内を激しく突き上げた。麻田は浮かび上がっていくマンツの端をつかんだ。

「これは、私のだ」

返事はなく、マンツを引っ張る力が強くなった。麻田も持つ手に力を込めた。双方の力が

均衡して膠着状態になった。軽く柔らかいのとでも頑丈な生地だった。

引っ張り合う内、麻田の心に疑念が生まれた。俺は飛び降り自殺をするためにここに来たんだ。マントを取り返して、どうしようというつもりか？ まさか、あのしんどい仕事を再開するつもりなのか？ 再び、人々の悲嘆の聲に浸され、任務に失敗すれば残酷な光景を目撃して心が潰れ、うまく行ったとしても人生の苦境を救ってあげられるわけではないので、気は晴れない。感謝の言葉を受けることもない。そんなむなし仕事……。

ギッと、近くで音がした。屋上の出入り口の鉄扉が開こうとしていた。

その音に気を取られて、一瞬、麻田の手の力がゆるんだ。マントは麻田の手を離れ、たちまち見えなくなった。

出入り口の扉から、ワイシャツにネクタイ姿の男が出て来た。マントの消失には気づいていないようだ。男は麻田に一瞥しかくれず、煙草に火をつけながら屋上の端までゆっくり歩いた。

麻田は、まだ近辺にいるはずの救助者を捜すように首をめぐらしたが、煙草を吸う男の怪訝な表情の顔が目に入っただけだった。

麻田は、救助者の任務が成功したと認めざるを得なかった。生きていたいとは思わなかったけれど、死にたい気持ちも消え失せていたのである。麻田はリュックを取り戻すために、歩き出した。

リュックを肩に背負い直した後、麻田は目に見えない誰かに向かってつぶやいた。

「おめでとう。マントは君のものだ。いずれ大変なことを引き受けたと気づくだろうが、後悔はその時にすればいい」

階段を降り、エレベーターに乗り込もうとした時、突然麻田の両目から涙があふれ出した。ぬぐってもぬぐっても止まらない。間の悪いことに、エレベーターは途中階で停止した。

扉が開くと、二十代半ばと思しいおとなしげな女性が立っていた。エレベーターの中に涙をこぼす中年男を発見して驚き、足が止まっている。麻田は促すように一歩下がった。女性は恐る恐る入って来た。

麻田は何も聞かれていないのに、その場で思いついたことを口にした。声が少し震えていた

「いま、生まれたと連絡が入ったんです。うれし泣きで、涙が止まらなくて。驚かせて、ごめんなさい」

女性は麻田を見ないまま、小さくこくりとうなずいた。

決して嘘を言ったわけじゃない——麻田は心の中でつぶやいた。生まれたてのつやつやの赤ん坊だって、地上に生まれ落ちたことに気づくと泣き出すんだ。まして俺はたった一人、無一物の中年男の赤ん坊としてこの世に生を受けたんだから、泣いて当然じゃないか。

エレベーターが一階に着いて扉が開くと、女性は駆け出すようにエレベーターから出て行った。つむじ風を起こしそうな急ぎっぷりだったので、麻田は少し傷ついた。

雑居ビルのドアを開けた途端、街の騒音が一齐に麻田の耳に飛び込んで来た。辺りを行き

交う人々の声は、もはや麻田の感情を動かさなかった。

　　どうやら本当に解放されたようだ、と麻田は思った。ヒーローは死んだんだ。これから新しい人生が始まる……全くありがたいことに。

　　浅田はまぶしそうに手をかざし、ビルの外へと歩き出した。

「マント」は、文芸誌「群像」（講談社刊）二〇〇六年一〇月号に掲載された短編小説「ヒーローの死」を大幅に加筆、改稿したものです。

マント

発行 令和元年 五月五日

著者 伊井直行 II Naoyuki ©2019

発行所 レワンニワ書房 <https://rewaniwa.com/>

Rewaniwa

